

1986年8月23日

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

(はじめに)

平城宮跡発掘調査部は第173次調査として推定第二次朝堂院の東第二堂の発掘調査を行ってきた。発掘面積約1600㎡、調査は7月1日より開始し、現在継続中である。

調査地は「第二次」大極殿の東南方にあたる。この「第二次」大極殿院地区については数次にわたる調査によってその様相が明かとなり近年、調査は大極殿院の南に位置する朝堂院地区に及んでいる。朝堂院の東第一堂については一昨年の調査によって概要が明らかになっている。今回の調査はそれを受けて、東第二堂の規模と構造及び、第二堂に先行する下層遺構の有無とその規模を確認することを目的としている。

調査地は奈良山丘陵から南に延びる尾根の一支丘上に位置し、東及び南に向かって緩やかに傾斜している。朝堂院の建設にあたっては、この旧地形をかなり大幅に整地している。つまり、宮造當前の傾斜地の上に3層にわたって土盛り、整地し、その上に殿舎を建設している。

(検出遺構)

検出遺構は、朝堂院第二堂、及びその下層遺構、堀立柱東西棟、堀立柱南北堀、足場穴の可能性のある小柱穴群などである。以下簡単に説明を加える。

朝堂院東第二堂(SB01) 瓦葺き礎石建ち9間×4間の四面廂を持つ南北棟建物である。基壇の北、東、西の各辺は後世の耕作等によって大幅に削平され、礎石も全て抜き取られていたが、根石の一部(7カ所)と、階段の痕跡、東第一堂調査時にも検出した基壇西縁の湿気抜きの「めくら」暗渠などの存在によって第二堂の基壇規模を復原することができた。柱間は、存在した礎石からみて桁行・梁行とも13尺(3.9m)等間で、廂の出が10尺、第二堂の柱間総長は南北111尺(33m)東西46尺(13.5m)となる。

階段は、基壇西面と北面にある。西面は、第二堂西面の正面及びその左右の3

カ所に、北面は中央に1カ所がある。これらの階段自体は全て失われているが、階段耳石の地覆石の据つけ痕跡がかすかに残る。

基壇の築成は掘込地業を行わず、整地層の上に、4～5層程度の基壇土を積み、行っている。版築はかなり雑である。

基壇化粧は、西面の一部で検出した凝灰岩地覆石の痕跡などからみて、凝灰岩切石による壇正積み基壇であろう。礎石位置と地覆石の痕跡から復原した基壇は廂から7尺外になる。この第二堂は、二年前に検出した第一堂に比べると桁行が二間分長い事が異なるだけで、梁行・柱間寸法とも一致し、二つの建物は南北に柱筋を揃えている。

なお、上層の第二堂に伴う遺構として基壇西側を南北に走る幅40cm、深さ10cmの隙をつめた溝SD03、北側の2間×3間の堀立柱東西棟建物、二条の堀、及び基壇東側に点在する小柱穴群があるが、いずれも短期間のうちに埋められ、基壇外周は一面に細礫が敷かれていた。

東第二堂下層遺構(SB02) 第二堂と重複して存在する堀立柱建物。西側に廂をもつ12間×3間の南北棟で、柱間は桁行・梁行とも10尺等間である。堀立柱建物は、すでに東第一堂の調査時においても検出しているが、第一堂のそれが、上層遺構の軸線と約7m西にずれるのに対し、今回のSB02は、南北の軸線を上層遺構のそれとほぼ揃えている点が大きく異なる。このSB02は、第一堂下層建物SB11740の約80尺(24m)南にあり、第一堂下層の東廂と第二堂下層の身舎西側柱が柱筋をそろえる。

(遺物)

軒瓦が47点出土しており、その中でも軒丸瓦6225型式と軒平瓦6663型式が計29点にのびり、第二堂の所用瓦も他の第二次朝堂院地区と同様の組合せであるという事を示している。

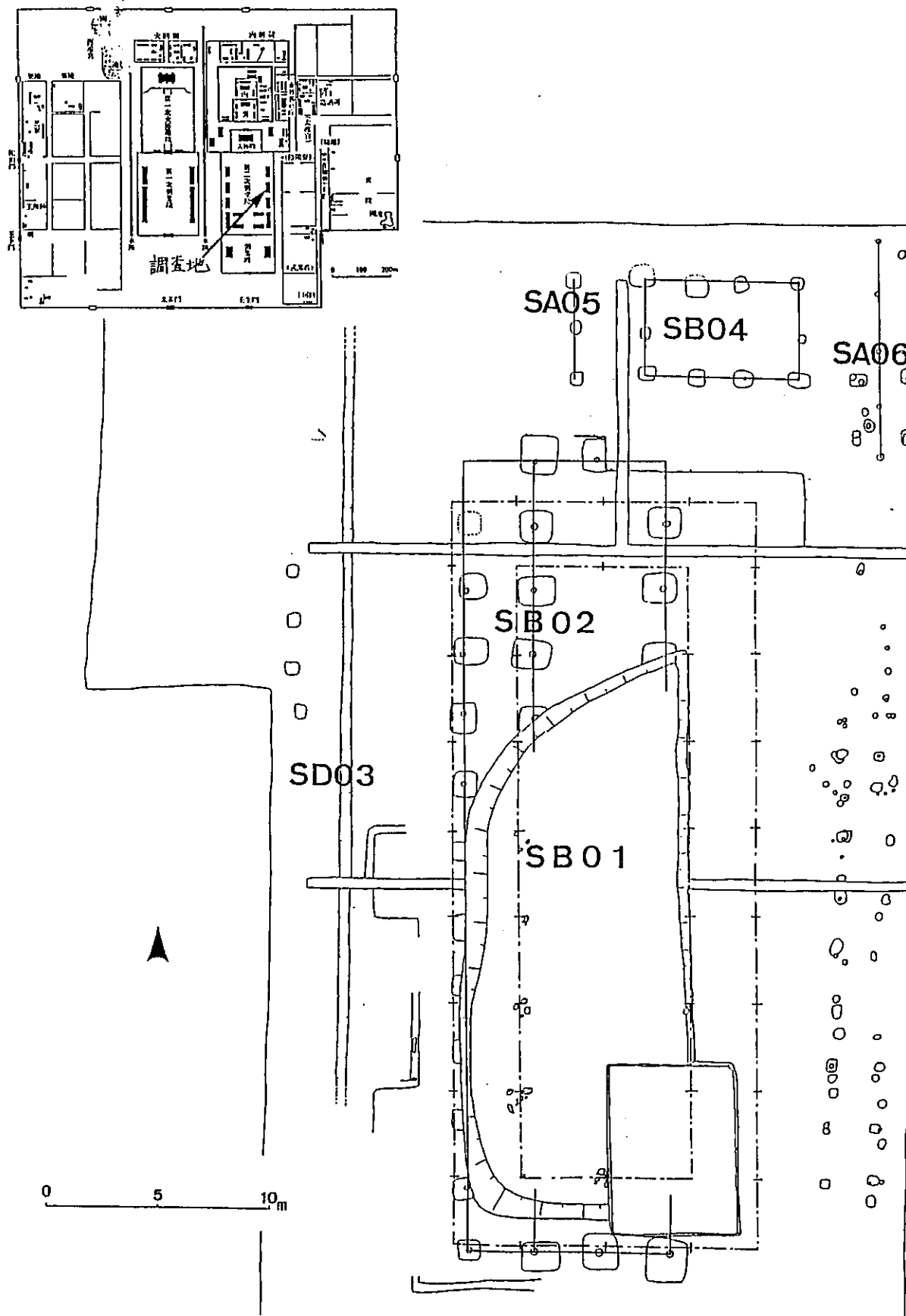
(成果と意義)

今回の調査によって明らかになった点を以下に列挙しよう。

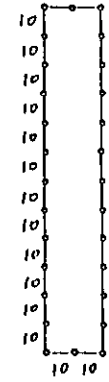
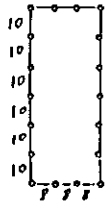
1. 「第二次」朝堂院東第二堂の規模と構造が明らかになったこと。この第二堂は、従来の復原では切妻の建物と考えられていたが、先に述べたように7間×4間の四面廂建物で、入母屋建物と判明した。また、東第一堂においては、

西面の階段のみ明かで、北の階段は不明であったが、第二堂では北にも階段を持つことが明らかになった。

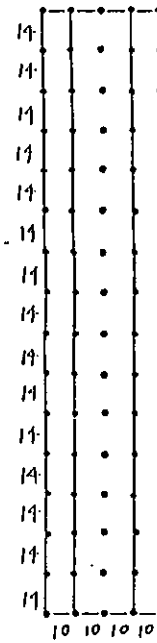
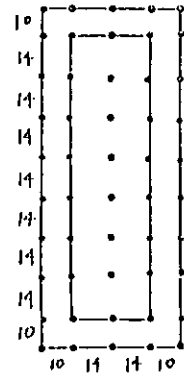
2. 東第二堂の下層においても、第一堂と同様に掘立柱の殿舎SB02を検出した。規模等に違いはあるものの一連の遺構と考えることが出来る。今回のSB02は、上層のSB01にほぼ重なり、SB11740の軸線に対しては約7m東にずれる。同じ下層の掘立柱遺構でありながらSB11740とSB02とで、これほど軸線がずれる理由については今後の検討課題だが、上層の朝堂との関係から考えると、むしろSB11740の方が中央によっているのであり、第三堂以下の下層遺構も上層の朝堂と軸線を揃えている可能性が強くなり、全体で十二堂の遺構群と想定することが可能となった。
3. 「第二次」朝堂院の下層遺構の性格をどの様に考えるかは大きな問題であるが、上にみたように掘立柱の遺構群が、上層の朝堂とほぼ対応して12棟並ぶとすると、その性格としては朝堂と考えるべきであり、そのことを前提にして、第二次大極殿下層遺構及び、この地区全体の性格を考えていく必要がある。
4. 和銅3年(710)の平城遷都の当初、大極殿は朱雀門の正面(「第一次」大極殿地区)にあったことはほぼ確実である。この大極殿の南に接して営まれた朝堂院は、藤原宮と異なる四堂型式の朝堂院である。この朝堂院は近年の調査によって、建造年代が遷都からやや降って、靈龜以降と考えられている。他方、平城宮朝堂の用例は和銅末年にはすでにみえており、この朝堂をいかなる遺構群にあてはめるか、懸案になっていたが、今回のSB02を含めた「第二次」朝堂院下層遺構全体が、この初期朝堂にあたる可能性は大きい。
5. 以上の仮説に誤りがないとすると、平城遷都の当初(靈龜以降)、朱雀門の正面には中国の長安城含元殿を模した大極殿が、その南には礎石建ちの四堂の朝堂院があり、これに隣接した東(壬生門の正面)には掘立柱という「伝統的」建築様式による十二朝堂があったことになる。すなわち、平城宮の初期に、すでに二つの朝堂が並列していたのである。この姿は同じ平城宮の奈良時代後半(上層遺構)を経て、後の平安宮において朝堂院と豊楽院という二つの朝堂が並列する原型となるものである。



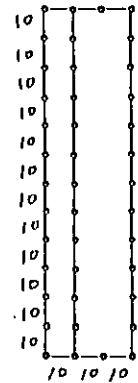
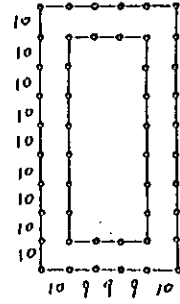
前期難波宮



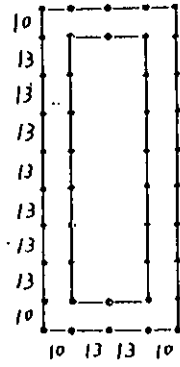
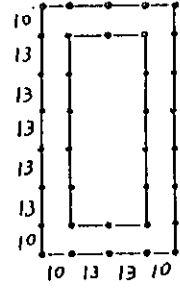
藤原宮



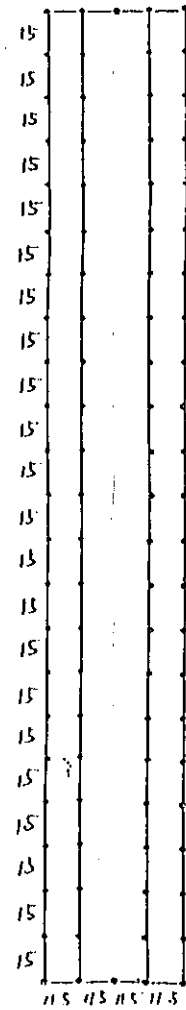
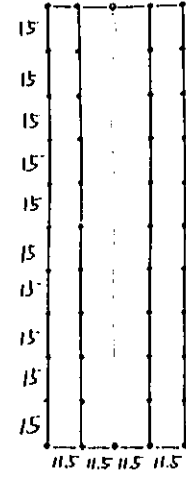
第二次平城宮
(下層)



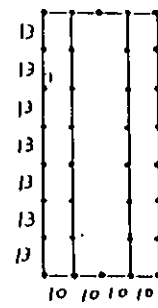
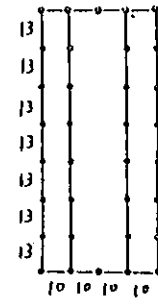
第二次平城宮
(上層)



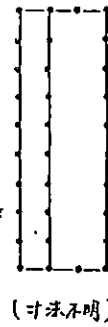
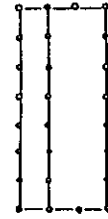
第一次平城宮



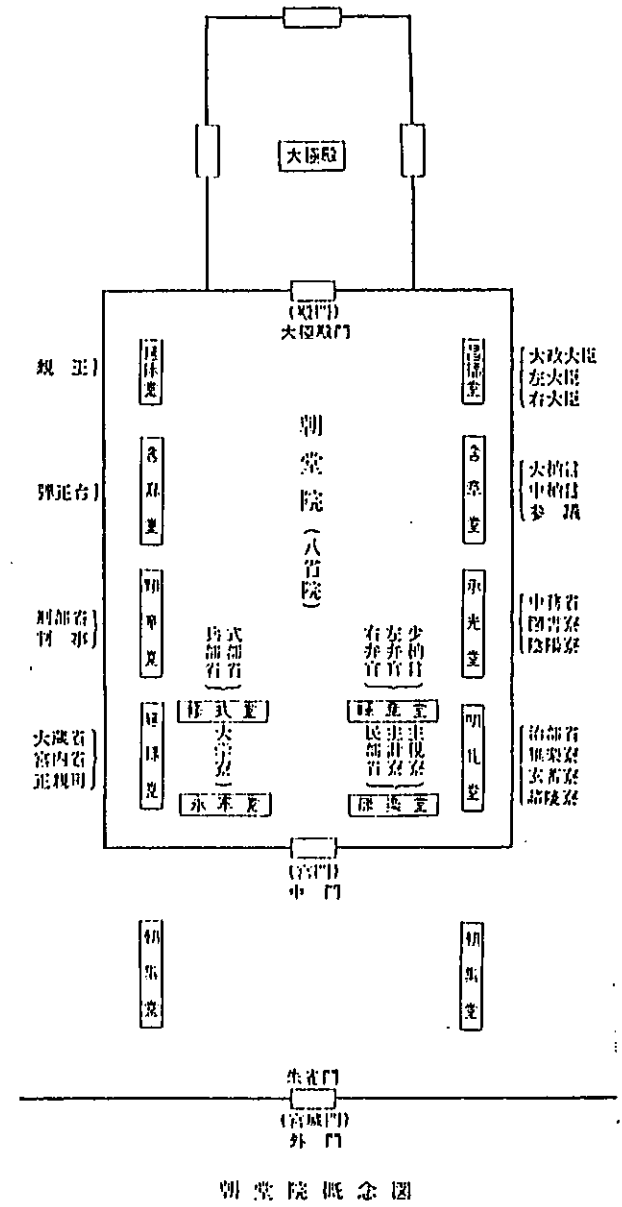
後期難波宮
長岡宮



平家宮

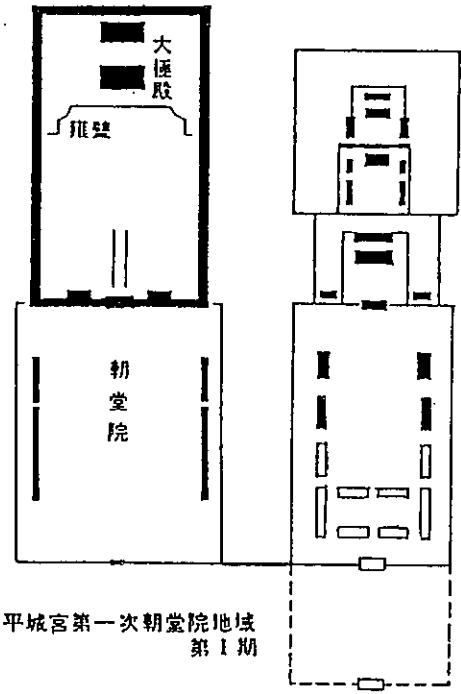


朝堂院・第一堂と第二堂の比較

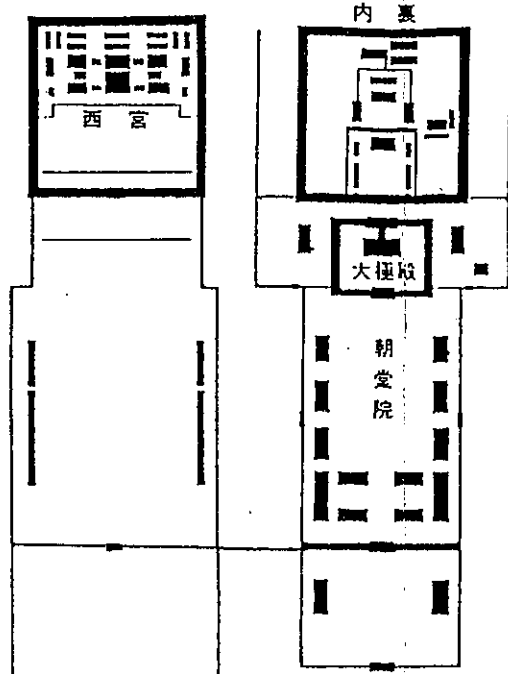


奈良時代初期の朝堂関係史料

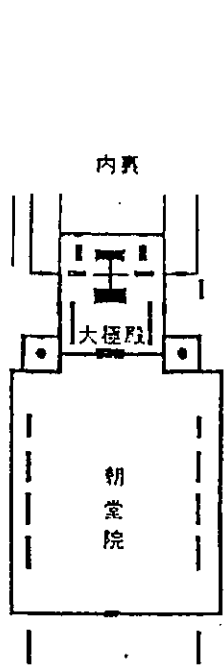
- (1) 和銅六年十一月十六日ノ宮宣ニ仰ク、親王、太政大臣、朝堂ニ出入スルトキ、式部、下座ノ事ヲ告知ス、ソレ左右大臣ハ座ヨリ動キ、五位以上ハ床ノ下ニ降り立キ、余ハ座ノ下ニ跪ク。座ニ就キ、及ビ門ヨリ出レバ訖ルトモニ座ニ復ス。(三代史記、元慶八、五、二九条)
- (2) 聖德元年正月庚子(十七日) 大射ヲ南陽ニ賜フ、新羅ノ使モマタ射ノ列ニアリ、綿ヲ賜フコト各ノ差アリ、(「続日本紀」以下同じ)
- (3) 聖德二年正月戊寅朔 朝ヲ廢ス、雨フレバナリ、五位以上ヲ朝堂ニ享ス、
- (4) 養老元年四月甲午(二十五日) 天皇、西朝ニ御ス、大隅、薩摩ニ國ノ事人等、風俗ノ歌舞ヲ奏ス、位ヲ授ケ録ヲ賜フコト差アリ、
- (5) 養老七年八月辛丑(九日) 金貞宿等ヲ朝堂ニ享ス、射ヲ賜ヒ并ビニ諸方ノ樂ヲ奏セシム、



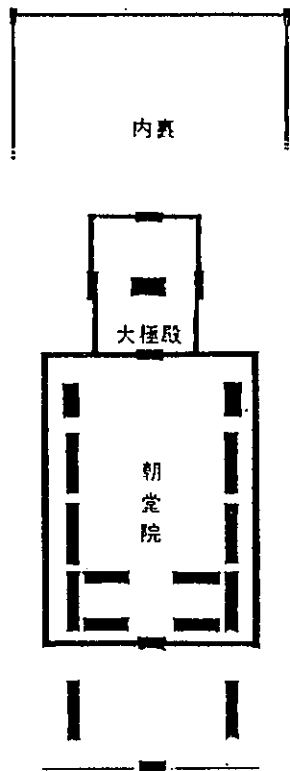
平城宮第一次朝堂院地域
第I期



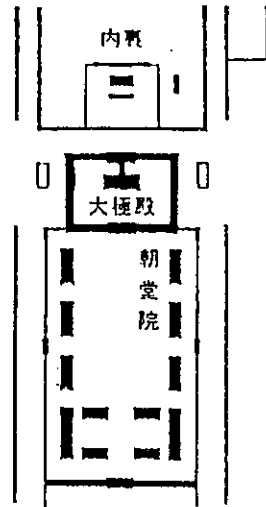
平城宮第一次朝堂院
地域第II期 平城宮第二次朝堂院地域



前期難波宮



藤原宮



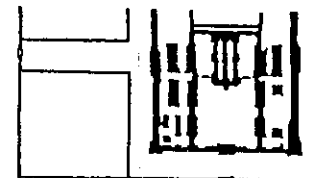
後期難波宮



長岡宮



平安宮



内裏